



飯能ロータリークラブ会報



唐竹晩秋 Karatake in late autumn

© photo by Isao Yoshida

ロータリーは機会の扉を開く

RI会長 ホルガー・クナーク

2570地区ガバナー 相原茂吉

第3グループ
ガバナー補佐 西澤長次

Let's make fellows! 友達をつくろう

第2935例会 2020.11.18

——ロータリー財団月間——

天候 晴 (NO. 57-21)

会長 田辺 實 幹事 森 健二

例会日 水曜日(12:30~13:30) 当番 鈴木(康)君、都築君

例会場: ホテル・ヘリテージ飯能sta.

☎(042)975-1313 〒357-0038 飯能市仲町11-21

事務局: 飯能商工会議所内 〒357-0032 飯能市本町1-7

☎(042)973-1661 FAX(042)973-1662

http://www.hanno-rc.org/ E-mail: hannorc@hanno.jp

- ・点鐘 田辺会長
- ・ソング それでこそロータリー 四つのテスト
- ・ロータリーの目的唱和 加藤職業奉仕委員
- ・3分間スピーチ
- ・卓話 木川一男会員

【会長報告】

台湾のコロナ対策は3F:Fast、Fair、Funで成功したとの事。当クラブもスローガン「自己管理で感染予防」で、楽しく意義ある例会が続けられるようご協力をお願いします。入会候補者に異議がありませんでしたので1月に入会式を行います。財団海外派遣学生募集の件は大崎地区財団委員、矢島(巖)委員長よりお願いします。2021年RI国際大会:台北、参加希望の方は神田(康)国際奉仕委員長まで。川越、人間RCでは多くのメンバーが参加予定だそうです。

「人の心に光を灯す」彼女の生家は代々の農家。物心つく前に母を亡くしたが寂しくはなかった。父に可愛がられて育ったからである。父は働き者で3haの水田、2haの畑を耕し、村のためにも尽くした。行事や共同作業には骨身を惜しまず、事があるとまとめ役に走り回った。そんな父を彼女は尊敬していた。父娘二人の暮らしは温かさに満ちていた。彼女が高校3年の時、悲劇が起こる。父の運転するトラクターに居眠り運転のトレーラーが衝突。彼女が病院に駆け付けると父は苦しい息の下から途切れ途切れに言った。「これからはお前一人になる。すまん。ああ、い、いか、これからはお蔭様お蔭様と心で唱えて生きていけ。そうすると必ず皆が助けてくれる。お蔭様をお守りにして生きていけ」。それが最期だった。父から貰ったお蔭様のお守りは彼女を裏切らなかった。親切にしてくれる村人にはいつも「お蔭様」と心の中で手を合わせた。彼女のそんな姿に村人はどこまでも優しく、その優しさが彼女を支えた。父の言葉が彼女の心に光を灯し、その光が村人の心の光となり、さらに照り返して彼女の生きる力になったのだ。

作家・高見順は晩年、食道がんの手術をして病床にあった。ふと窓外を見ると風雨の中、少年が新聞を配達している。その姿に胸を揺さぶられ一片の詩を書く。

「なにかおれも配達しているつもりで/今日まで生きてきたのだが/人々の心になにかを配達するのがおれの仕事なのだが/この少年のようにひたむきに/おれはなにを配達しているだろうか」。ひたむきな新聞少年の姿が晩年の作家魂に光を灯した。心に光を灯された体験は誰にもあるのではないか。人の心に光を灯す。それは自分の心に光を灯す事でもある。ロータリアンとしてそういう生き方をしたいものです。

【幹事報告】

12/2第7回理事会。来月クラブ協議会。欠席の場合代理人名をご提出下さい。Xマス家族会については坂本(渾)委員長よりご説明があります。本庄南RCは2570パスポートRCに名称変更。地域は本庄地区および周辺、全世界という形で承認されたようです。

【委員会報告】

◎米山記念奨学委員会 中里(忠)君
馬場正春会員より米山功労者マルチプル(2回目)の特別寄付を頂きました(拍手)。

◎親睦活動委員会 坂本(渾)君
Xマス家族会も4名様テーブルに飛沫防止パネル、空調と扉開放による換気を行います。お食事を堪能される事を目的とし移動は控えて頂きます。安心してご参加頂けますようご家族様にもお伝え下さい。

【出席報告】MU・無届欠席0 鈴木(勝)出席向上委員

会員数		当日		前々回修正 出席率
全数	対象	出席数	出席率	
69名	6名	67名	97.10%	地区大会振替の為 休会。修正なし。

【SAA報告】

◎ニコニコBOX

- ・木川先生、卓話有難うございます。よろしくお願ひ致します。 田辺君
- ・入会記念有難うございました。 吉島君
- ・遅くなりました。 本間君
- ・早退します。 佐々木君

本日計7,000円、累計額554,000円。
◎2日例会当番は吉田(健)、矢島(巖)会員です。

【卓 話】

講師紹介

伊澤プログラム委員長

S32年、中央大学第一経済学部卒業。現在、中央大学商議員、はんのう市民環境会議顧問、飯能グリーンCC名誉理事長。H2年、RC入会。H21年、第46代飯能RC会長就任。2017-18年度RI第2570地区第3グループガバナー補佐。飯能靖和病院、飯能整形外科病院、飯能老年病センター、フェリーチェ・レディース・クリニック吉祥寺、4か所の医療機関の靖和会グループ会長。社会福祉法人特別養護老人ホームつつじの園(狭山市)会長。

飯能市立病院の歴史と 県内自治体病院の状況について

飯能RC 木川一男会員

私共の医療法人が飯能市東吾野医療介護センター(旧飯能市立病院)の指定管理者として経営に携わり10年が経過しました。飯能市立病院が設置されて70年です。S23年5月、飯能町に編入前の東吾野村が建坪88坪、病室7室の国民健康保険組合診療所を開設。現在地とは少し外れた場所で、建築費は298万円(現在の貨幣価値で約3千万円)。当時、西武鉄道の終着駅は吾野駅(正丸トンネルが開通して秩父まで延長されたのはS44年)。東吾野村は無医村で、飯能町から10キロ奥の山間地で生活する村民にとって悲願の医療施設でした。しかし1年も経たず翌年3月に焼失。驚くのは、すぐ再建に取り掛かり、同年8月に建物完成、S25年4月には一般床10床、結核病床10床、計20床の村立東吾野病院が再スタートします。当時の村長、第16代・大野光三氏は新井景三会員のお父様、坪数約150、旧診療所の約1.7倍。診療科目は内科・外科・婦人科。地域医療の核として住民の健康管理にあたる事になりました。県内の自治体では初の病院開設で、大きな話題にもなりました。火災後は地元民に調査を行い、再建希望者が大多数だった事から進められました。地元の実業家、篤志家から材木の提供や多額の寄付があったとの事です。当時東吾野村は494世帯2816人。病院の開設・維持には多額の費用を要し、医師の招聘、看護師等の確保も容易ではありません。国・県の補助金があったとしても村単独での開設には相当な覚悟で臨んだものと思われれます。吾野村には長嶋病院がありましたが、入院出来る医療施設が出来た事は周辺住民にも安心感を与えたのではないのでしょうか。同年、朝鮮戦争が勃発。戦争特需は敗戦からの復興の大きなきっかけとなったと言われます。私は飯能高校に在籍しながら講道館に入門。高校生で2段に昇段した、県内2人のうちの1人でした。現在は柔道6段です。

政治も落ち着き始め、国策として市町村合併が進みS29年、飯能町は飯能市となり、S31年、吾野村・東吾野村・原市場村が編入。飯能市立東吾野病院と改名された病院経営も相変わらず厳しかったと聞きます。

33年を経て老朽化等が進み、S58年、現在の場所に一般病床50床の飯能市立病院が移転、新築されます。病床数の大幅増、市街地への建設等の案があったようですが検討を重ね、現在の場所に決まったそうです。県からは病院経営の難しさ、市の財政への悪影響を再三指摘されたと聞きます。医師の確保等、厳しい状況は続きましたが、医療過疎の状況は大きく改善。車社会の進展により道路も整備され、埼玉医科大学病院、防衛医科大学病院、石心会病院、青梅市立総合病院、国際医療センター等、周辺の医療環境が時代と共に変わってきました。市が両吾野で行った個別訪問調査では多くの住民がこれらの病院や専門性を標榜する市外の病院を利用しているとの回答があったようです。病院を選択出来る環境となり、医療過疎という意識は薄くなってきたと思われれます。

こうした調査・分析を基に、山間地域で必要とされる医療の確保と多額の赤字補填の削減が有識者会議



感染防止

で検討され医療と介護を合わせた複合施設の民間委託という改革プランがまとまります。29床の介護老人保健施設と19床の入院施設を備えた診療所を併用する、県内では画期的な複合施設で、1階で診療を受けそのまま2階に入院出来るという利便性が評判となったようです。市直営でなくなる事や病院の廃止が盛り込まれた事で、当初、職員や地元から一部反発があったようですが、説明の機会を重ねた事で理解を得られる状況に変わっていったとの事です。私共も初めての経験となる、指定管理者という立場での経営も10年経ち、今では地元住民から定期的に慰問ボランティアの支援も頂き、稼働率も高く、地域に定着した状況です。市の指定管理者制度事業の評価も、収支、利用者サービス等4項目の総合で最高の「S」評価を6年連続で頂いております。

数年前の経済誌、新聞記事によると、H29年度、全国925施設のうち約9割が医業損益で赤字、運営経費に売上が追い付いていない状況でした。放置すると経営が成り立たなくなるため、市は税金を投入、経営損益は約4割が黒字、他は赤字額が縮小された決算となります。埼玉の県立病院4か所で約140億円。市立病院では秩父市2億円超、東松山市約4億円、所沢市4億円超の赤字額が示されていました。

医療の市場は毎年国が決める診療報酬で料金が決まります。一般的な市場では各事業者が価格を設定し利益を求めていく市場原理に基づいた経営がなされますが、医療においては、決められた料金の下で収入を確保し経営的経費とのバランスを取りながら経営を行います。民間はどこもこの単純な方式の上で経営努力をしているわけですが、同じ条件下の自治体病院は9割が赤字で税金による補填が続くという事は、公立という立場上の目的、制約があるにしても経営上の問題点があるのではないのでしょうか。

12年程前、国が公立病院改革ガイドラインを示し各自治体に経営形態の見直し、効率化を要請していた時がありました。自治体病院の深刻な状況はマスコミにも取り上げられ、県内自治体でも検討委員会等を立ち上げ、組織の再編、指定管理者制度の導入等の検討を行ったようです。しかし、問題の本質的な部分に着目し、具体化したのは飯能市だけでした。他の自治体は住民感情、利害対立等、地域医療を取り巻く要因が複雑に絡み合い、抜本的改革には至らなかったようです。

今回、国が改めて新公立病院改革ガイドラインを作成し各自治体に改革を要請した事は、前回の要請から10年以上経った今でも、改革に向けた取り組みが進んでいない事を裏付けるものだと思います。飯能市立病院もS58年からH21年まで、毎年約2億円の赤字補填が行われてきました。病院の規模からすれば大きな額で、市議会でも度々取り上げられ、27年間の総額は54億円だったと報告されています。

この長年の懸案であった市立病院の改革に強い指導力をもって取り組まれたのが当時の沢辺市長です。改革に向けて庁内組織を編成、有識者会議は実情を知る人達で構成する等の体制を整え、問題点を抽出し、住民の意識調査を行い、求められる医療等について協議を重ねられたそうです。市の将来のため、財政の健全化に功績を残された事に改めて敬意を表したいと思います。この改革の状況を国が公表した事により、飯能市には熊本や鳥取から市議会が視察に訪れています。ここに至るまでの最も大きな課題は委託出来る事業者を確保する事だったと伺いました。交渉先からは立地条件の悪さと周辺の医療環境から見て病院の必要性の薄さを必ず言われたそうです。私共にお話が来た時も、内部には受託に否定的な意見も多くありましたが、市の改革への熱意に動かされた事と、この地で医業を営む者として地域への貢献を意識した事が、指定管理者受託に至った経緯である事を申し上げ、本日の卓話と致します。